

刊行のことば

Towards the Publication of *Ogata Kenzan: Collected Research*

Johannes Unsok Ro

Director, Institute of Christianity and Culture (ICC)

International Christian University

Ogata Kenzan (1663-1743) is recognized as one of Japan's greatest potters, and his work, which brings the arts of painting, poetry and calligraphy into the ceramic vessel, is celebrated worldwide.

The research of Richard Wilson and Saeko Ogasawara echoes the interdisciplinary nature of the Kenzan style. Drawing on their respective backgrounds in studio ceramics and tea ceremony as well as art history, the authors have surveyed Kenzan ceramics and painting worldwide, excavated wares from his kiln site and studied them using scientific techniques, and searched libraries and archives to trace the sources of his Chinese and Japanese poetic themes.

These efforts have transformed Kenzan studies from a connoisseurial pastime to a serious academic field, setting the standard for all future research.

From 2013 the authors began to submit lengthy articles to *Humanities: Christianity and Culture*, our ICC journal. By 2021, these had reached a total of nine, totaling over 1000 pages. These contributions figured significantly in their being awarded the Forty-Second Annual Koyama Fujio Commemorative Prize for distinction in ceramic studies for the year 2021. Now, as ICC Director, it gives me great pleasure to welcome the renewal of our tradition of producing supplements for distinguished research, starting with this collection of essays by Wilson and Ogasawara. I am confident that the new and enlightening perspectives in this precious volume will stimulate future studies at our Institute.

『尾形乾山:研究集成』の出版に向けて

国際基督教大学 キリスト教と文化研究所所長 魯 恩碩

尾形乾山（1663-1743）は、日本のすぐれた陶芸家の一人として知られている。詩、書、画の芸術を陶器に取り入れた作品は、世界において称賛されているが、長年に渉るリチャード・ウィルソン、小笠原佐江子両氏の研究は、広く時代、文教、技術を反映。世界に散逸した乾山銘陶磁器、絵画作品を調査。遺跡・窯跡の出土陶片ほかを科学的手法を用いて分析。文書調査によっては作品に引用された中国、日本の文学的、詩的テーマの出典などを明らかにした。陶磁器研究の学際的、総合的研究の魁けであるが、乾山焼を本格的な学術研究へと導き、新たな発見、顕著な成果は今後の研究の基盤、基本となることを確信する。

2021年度第42回小山富士夫記念賞を受賞、当研究所においても、優れた研究に対して別冊刊行という新たな伝統を出発させることができた。

貴重な本書からは新たな視点、刺激の与えられることを確く信ずる。

はしがき

乾山焼には真贋混淆、数千点の作品が現存する。

一つに、創始者尾形乾山の在世時代から「みやこ」の名物となり、土産物になったことに由来するが、京焼諸窯では即それらを模倣。今日残る雑多な銘、様式、技法がそれを伝える。

乾山焼には工房があつた。同じく画人・工人の手も加わり、二代乾山を継承した尾形猪八、代々乾山、さらに現在に至るまでには種々の模倣者らの作品が入り混じる。

例外もあるが、やきものは量産である。茶陶と異なり、乾山焼には乾山時代に遡り所有者を特定し、系統立てて論証、疑問を挟む余地のない真作品は皆無である。近年は考古学の進歩もあり、出土・発掘品の比較、検討、窯址周辺などの地質調査、化学分析など、踏み込んだ研究が可能となった。我々もデータベース研究を始めて以来四〇年近い歳月が流れる。新たに画譜様式の出典を究明、陶法書「初代乾山口述二代筆記」写本を見つけ出したが、乾山は多くの遺産を残して逝った。別して後世の陶法書はその証左の一つとなる。

やきものに書を用いたこと、乾山個人の能筆に負うのであるが、日本の陶芸史上初の試みであり、同時にそれは模倣者らの限界を生み、真贋判定の一つの鍵を提供する。書は書く者の証明である。形状は似せても、呼吸・運筆・構成如何は書手自らのものである。模倣者には極めて厄介な問題であるが、乾山はしばしば落款を書き入れた。落款は古来中国文人のしきたりであり、書・画が完成、作者は自ら年月、姓名、跋語などを記し、雅号とする印章を押捺する。乾山焼には書銘もある。が、筆を用いれば同じことである。書者の特性は留められ、筆跡は製作者の足跡となる。が、これだけでは真贋の分別には至らない。合わせて文献・文書、様式、陶技・陶法の追求が必須となるが、製作に当たり乾山は作品の主題、形態、焼法にきちりとした筋道をつけた。

現存する作品からは茶碗、碗蓋(角皿)・向付・鉢が多く、一つに自らの発案による画譜様式、二つに兄光琳の考案を応用した琳派様式、三つに国内外の装飾陶磁器古物模写を主体とし、趣旨と表現、その方法、陶技、陶法の揺るぎのない結びつきが初代乾山、尾形深省の特色である。

「書」は書法を習得、正確な点画と結体、明快な筆意、筆勢、肥瘦潤濁の変化、自書故の潔さがある。「画」は光琳の助力もあり、彩色画、水墨画、和漢の古典に基づく画技・画題とその心得。

「陶」は京焼の始まり低火度焼成押小路焼、典型を築き上げた高火度焼成仁清焼の陶法を基盤とする。

乾山焼は視覚文化の『円機活法』とも云えるのではないか。幅広く文学、芸能、衣食から漆芸、陶芸、当時の趣味人・文化人の興味を捉え、対象物を陶器に集成。富裕町人の豊かな教養、独創力、気力を伝え、時代の特性を呈示するが、書陶画全作品を総覧、乾山の力量とその表現、当時の文化的背景、教寄者の知識、価値観、その広さ深さまでも分明する。総合的にそれらを伝えるやきものなど乾山焼をおいてほかにはないであろう。

創造は安易な道からは生まれぬ。伝統は、伝承する技を極め、そこから自らの技を創り出すことであろう。如何なる事柄も自己の器以上に学び得ないが、小さければ溢れ出し、大きければゆとりが生ずる。日々その器を知り、大きく成し、やがて破裂、天に散り地に果てる。

乾山は工人仕事のやきものに落款・銘を書し、一介の陶工ではないことを明示した。胸中には万巻の書があり、目にはすぐれた先人の画跡、筆跡があつた。豊かな環境、貴人なみの教育。が、青年期には独居を決し隠居の身となる。負の思いを背負つたものか、世上の煩わしさを避けたものか。が、時が経ち、積み重ねれば隠遁も日常化、俗世化せざるを得ない。が、思いを尽くし、心は澄む。乾山焼を世に送り出す準備も調うか。

存在を賭けて創造の仕事をもつことなど、悟りきつた人間にはできないであろう。迷い、苦しみ、惨めな思いこそ、昇華すれば創作の道へと導かれる。「高く心を悟りて俗に帰るべし」と芭蕉はいう。書画の師は「錬筆を知るも、錬心あるを知らず」と諭すが、心の持ち方が作品をつくる。「陶冶の道」、乾山は「文人」であり「茶人」「陶人」「画人」であつた。極め尽くし、限らない豊かさは内蔵される。

「うきこともうれしき折もすぎぬれば ただあけくれの夢ばかりなる」と乾山は辞世に結ぶ。

二〇二三年三月吉日

リチャード ウイルソン

小笠原 佐江戸

凡例

一、本書は、二〇一三年以来、一年に一冊、九回に渉り、国際基督教大学学報「人文科学研究 キリスト教と文化」に掲載された尾形乾山、乾山焼研究に、加筆、訂正したものである。

年譜および関連文書、乾山焼の造形のルーツ、発想とデザインの資源、画譜様式の出典、印章と花押、出土陶片と土の分析、窯跡・各遺跡の考察、陶法書の検証、江戸における乾山の作陶、活動などを本拠に著した。

二、乾山名は「乾」、緒方姓は「尾形」を用いている。

三、原則として新仮名づかい、常用漢字を用いたが、乾山焼関係陶法書、文書、作品、箱書、引用文などはこの限りではなく、旧漢字・異体字・略字・難読語を含む。

四、年号、月日、年齢、その他数字は漢数字を使用した。数量を示す数字は○を含む漢数字を用いている。慣用語はこの限りではない。

写真・資料提供者・機関一覧

日本・

石川県立美術館、板橋区立美術館、出光美術館、逸翁美術館、梅澤記念館、颯川美術館、MOA美術館、大阪市立美術館、大倉集古館、大樋美術館、大松美術館、岡田文化財団、京都国立博物館、北村美術館、群馬県立近代美術館、神戸美術館、高津古文化会館、五島美術館、サントリー美術館、サンリツ服部美術館、静嘉堂文庫美術館、石水博物館、鐵竹堂瀧澤記念館、東京国立博物館、土岐市美濃陶磁歴史館、野村美術館、根津美術館、畠山記念館、浜松市立美術館、彦根城博物館、福岡市立美術館、藤田美術館、細見美術館、M I H O・MUSEUM、大和文華館、湯木美術館、樂美術館、洛東遺芳館、黎明教会

海外・

アメリカ国立自然史博物館、イエール大学美術館、ウィクトリア&アルバート博物館、ギメ東洋美術館、クリーブランド美術館、シアトル・アジア美術館、シカゴ美術館、スタンフォード大学美術館、ストックホルム東アジア美術館、大英博物館、台北故宫博物院、チェルヌスキ美術館、デンマーク国立博物館、ネルソン・アトキンス美術館、ハンブルグ工芸博物館、ピーボディ・エセックス博物館、フリア美術館、ブルックリン美術館、ボストン美術館、ホノルル美術館、メトロポリタン美術館、モントリオール美術館、ライクス・ミュージアム、ロイヤルオンタリオ博物館、ロサンゼルス・カウンティ美術館

遺跡関係・

大阪市文化財協会、神奈川県立歴史博物館、金沢市教育委員会、京都市埋蔵文化財研究所、京都市考古学資料館、京都大学埋蔵文化財研究センター、京都府埋蔵文化財調査研究センター、佐賀県教育庁、佐渡市教育委員会、三田市教育委員会、渋谷区教育委員会、東京学芸大学広域自然科、東京大学大学院総合文化研究科、東京大学埋蔵文化財研究所、東京国立博物館資料室、東京都汐留遺跡調査会、東京都新宿区遺跡調査会、東京都埋蔵文化財センター、東京都大学文化財総合研究センター、同志社大学校地学術調査委員会、栃木県埋蔵文化財センター、長野県飯田市大宮下横町遺跡調査会、パリノ・サーベイ考古学研究室

文献・文書関係・

叡山文庫、永青文庫、大阪府立中之島図書館、京都府立京都学・歴史館、京都市立芸術大学図書館、国立能楽堂図書館閲覧室、国立国会図書館、国立公文書館、国際日本文化研究センター、一般財団法人J・フロントリテイリング史料館、天理大学中央図書館、東京大学東洋文化研究所図書館、東京都中央図書館、東京芸術大学図書館、東北大学図書館、一橋大学附属図書館、広島市立図書館、法政大学能楽研究所、矢口丹波記念文庫、早稲田大学図書館

化学分析関係・

ワシントンDC・スミソニアン研究所、ロンドン・オックスフォード大学考古学科学研究所、東京学芸大学教育学部科学研究室、東京大学総合研究資料館、パリノ・サーベイ考古学研究室、国際基督教大学元考古学研究センター

(順不同)

目次

刊行のことば 国際基督教大学ICC所長 魯恩碩	i
はしがき	ii
リチャード ウイルソン 小笠原佐江子	ii
凡例	iv
写真・資料提供者・機関一覧	v
乾山焼大概	x
生涯と造形のルーツ	
一、乾山の伝記 年譜を礎 ^{いしずえ} として……………	3
はじめに	4
I 乾山の伝記……………	4
一、尾形深省乾山の大概	4
(一) 時代	6
(二) 人間形成	8
(三) 禅者の証明	11
(四) 文人生活	14
二、乾山焼	19
(一) 開窯の動機	19
仁清窯の盛衰	20
乾山の決意	22
二、乾山焼 発想とデザインの資源……………	105
はじめに	110
I 乾山焼創始までの大概……………	110
一、教育	110
二、職人・商人	118
II 作品様式の典拠と実証……………	130
一、書籍	130
二、服飾	146
三、茶の湯	160
四、料理	168
五、漆芸	186
六、陶芸	198
おわりに	
(一) 陶法の基礎	23
内窯陶法・押小路焼	23
本窯陶法・仁清焼	24
II 乾山関係年譜と関連事項……………	25
目次	26
(一) 雁金屋時代	27
(二) 習静堂時代	49
(三) 鳴滝時代	63
(四) 二条丁子屋町・聖護院時代	78
(五) 江戸・入谷村時代	90
おわりに	

画讚作品篇

	一、草花木	356
	二、竹木・その他	427
	おわりに	
三、乾山焼	画讚様式の研究(二) 山水・人物・禽獣	221
	はじめに	
	I 画讚様式と乾山焼	222
	一、画讚様式	223
	二、乾山焼における画讚様式	224
	II 詩・書・画	227
	一、詩	227
	二、書	246
	三、画	255
III 乾山焼作品		257
	一、山水画	257
	二、人物画	305
	三、禽獣画	324
	おわりに	
四、乾山焼	画讚様式の研究(二) 草花・竹木・その他	345
	はじめに	
	I 乾山焼・画讚様式	346
	花鳥画	346
	(一) 中国	346
	(二) 日本	349
II 乾山焼作品・主題別考証		356
五、乾山焼	画讚様式の研究(三) 和歌・物語・謡曲	475
	はじめに	
	I 乾山焼・画讚様式・和歌図	476
	一、和歌・連歌・俳諧・物語	476
	二、絵画化への道	489
	三、乾山焼作品・和歌図ほか	506
II 乾山焼・画讚様式・能絵		538
	一、能・謡(謡曲)	538
	(一) 歴史と様式	538
	(二) 能(猿楽)の様式と構成	555
	(三) 能・謡と古典文学	560
	(四) 能・謡の波及	564
	二、乾山焼作品・能絵ほか	572
III 画讚様式「和」における変化		600
	おわりに	
六、尾形乾山	書・画作品と関係文書	603
	はじめに	
	I 乾山書作品	606
	一、書のこと	606
	二、乾山の手跡	614

	II 乾山絵画作品	640
	一、絵画のこと	640
	二、乾山の絵画	650
	三、乾山絵画作品	658
	III 花押と印章	690
	一、花押のこと	690
	二、印章のこと	694
	三、乾山の花押と印章	698
	IV 乾山の消息	716
	一、小西家と「小西家文書」	716
	二、「小西家文書」の研究史	718
	三、乾山関係文書	722
	おわりに	
	II 消費地遺跡	784
	III 鳴滝窯採集陶片全資料	806
	一、鳴滝窯採集陶片七〇年間の記録	807
	二、考古科学研究 化学分析・胎土の研究	851
	おわりに	
	八、乾山焼 陶法書とその伝播	869
	はじめに	
	I 陶法書・伝書への道	870
	一、秘伝と伝授	870
	二、往来物・辞書・事典・全書・陶法書	873
	II やきものの秘伝書	878
	一、有田焼	878
	二、乾山焼	879
	三、やきもの製作	882
	III 乾山焼陶法書	886
	一、『陶工必用』	886
	二、『陶磁製方』	920
	三、『陶器密法書』	946
	四、乾山・猪八陶法書の伝播	968
	五、陶法書の比較	974
	おわりに	
	七、乾山焼 陶片資料とその工房	741
	はじめに	
	尾形深省乾山と乾山窯	742
	乾山窯の発掘と出土陶片	743
	I 生産地遺跡	747
	一、鳴滝窯	747
	二、聖護院工房	771
	三、入谷村工房	782
	工房と出土陶片 陶法とその伝播	

乾山江戸篇

九、乾山 江戸篇―その遺産

はじめに

I 江戸の乾山

一、公寛法親王と乾山 982

二、入谷村と乾山 998

三、今戸焼と入谷窯 1001

II 乾山焼と陶法書

一、初代乾山系陶法書 1017

二、二代乾山猪八系陶法書 1019

三、その他の陶法書 1021

(一) 乾山名のある陶法書 1022

(二) 乾山名のない陶法書 1023

(三) 専門陶工による陶法書・その他 1023

むすび 1025

III 陶法書の調査と新資料

IV 附録・乾山自筆陶法書

おわりに

補遺 伝承と継承者

―訂正事項―

あとがき

英文大概

1068

1073

(1) 1074

1028

1055

1017

982

981

乾山焼大概

乾山焼は、元禄期、京都において創始された裝飾陶磁器である。

製作者は尾形深省乾山。富裕町人であり、陶工の出自ではない。若年期には隠棲、文人を志すなど、やがて陶器造りを生業とするが、作陶を楽しむ、趣味とした数寄者・素人陶芸家の始まりであり、商品ではあるが、美の創作、表現を志す陶芸家らの始祖とも云える。

陶法書を著し、絵具、陶技・陶法、様式などを伝え残すが、作品、風趣、技術ともにそれらは乾山焼の遺産として今日へと伝承する。

協力者には絵師の兄尾形光琳、渡邊素信、京焼陶工仁清焼二代野々村清右衛門、押小路焼孫兵衛。支援者には撰家二條綱平、宮門跡聖護院、寛永寺六代門主輪王寺宮公寛法親王と同家坊官他が想定される。

元禄一二年…二條家山屋敷跡、洛西鳴滝山に開窯

正徳二年…洛中二条丁子屋町に移転、のち聖護院工房を設置

享保中期…江戸下向、寛永寺領内坂本村入谷窯において作陶

初開窯の鳴滝山では一一九〇坪の敷地に本窯、工房内に内窯を設け、土拵え・成形・素焼・裝飾・焼成までを一括処理。磁器もあるが、陶器を主体に高火度・低火度焼成、硬陶・軟陶、色絵・錆絵、茶道具、懐石道具などを製作する。ロクロ・型物・指物成形を中心として、床の間から畳の上へと、掛物・巻物・帖物、遊具のかるたを器態に転換。角皿・額皿・短冊皿などの平面器形、伝統的な茶の湯道具に則っては茶碗・火入・香合などの立体器形、懐石道具は鉢・蓋茶碗・変形皿、筒形などの向付が残る。

培われた京焼の伝統、技の継承、国内外の裝飾陶磁器に鑑みるなど、何より自らの創意工夫を第一としたが、

本窯…国内外の裝飾陶磁器古物模写

和歌・物語などの古典的 주제、光琳文様とその意匠

内窯…面讃様式を中心として、和様の主題は色絵陶法

漢詩・漢文など唐様主題には錆絵陶法

いずれにしても新趣向のやきものを創始。従来の技芸重視、出来映えの美を誇る職人技は、文人技、表現の妙、筆致の美へと大きく変転。別して白土の選択、かつてなかった内窯用白絵具の創案は、斬新かつ画期的な技法・用法として後に來たる作陶家らに受け継がれる。

消費者は町人が対象、撰家、寺院などの贈答品、茶事の使用も記録に残る。流通には注文製作、町売り、道具商の介入などを想定。土産物となりやがて一般化への道を進むが、洛中へと移転、養子を迎え、流行などにも敏感に反応。様式・形式・陶法他の簡略化を図る。

享保の中頃には江戸へ下るが、西鶴、近松らの指摘の如く、当時江戸へ向かうこと、往來することは社会的・文化的な地位を象徴。みやこの陶技が江戸へと伝播。後継者も京都と江戸に分派する。京都では養子猪八が二代を継承。が、商標とした琳派様式にも翳り、有田焼ほか磁器生産に押されるなど宝曆以後には衰退するか。

やがて五〇年が経過、文化・文政期になり京都に三代乾山宮田弥兵衛、受業三世蔵六堂呉介が現れる。江戸では入谷村出生次郎兵衛が二代を継承。陶法書「初代口述二代筆記」を認め、三代宮崎富之助へと橋渡しをする。陶法は拡散。京焼、江戸、地方の陶工、加えて趣味者、数奇者ら素人による作陶が伝世する。